
作者＆友人…そして例のキャラ達の紹介

エンディング・ＥＤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作者&友人…そして例のキャラ達の紹介

【NZコード】

N9706X

【作者名】

エンディング・ED

【あらすじ】

この小説は 作者が出す予定のキャラ達と…作者の友人達の紹介文です(笑)

インタビューの様な形式で行きたいと思います！

1・作者とその友人（早速グダグダだよ；）（前書き）

エン「こんにちは、作者です！」これはただの自己紹介です…」

OP「読み流しても良いって言つ人は、どうぞ…」

エン「…次のは暫くかけないかも…」

作者以外全員「オイ！…！」

1・作者とその友人（早速グダグダだ〜；）

「… とある洞窟の中にある、居住スペース。

そこにある人物こそ、作者である。

マリオ「え〜…早速、突撃インタービューしま〜す（つたくよ…何で俺が…）」

マリオ「…で、あんたが作者だよな？」

エン「その通りですよ 私はエンディング！」

（「…」）（マリオの視点です；）見た田は普通のヤツ。黒すぎる茶髪で、田は普通。何故か俺達がかぶつてる帽子と似たのをかぶつてるんだよな；
模様はEが傾いた様な感じで…色は青だ。

マリオ「一つ聞きたかったんだが…その帽子はどうしたんだ？」

エン「作ったんですよ」

？？「手先は器用なんだよな」

マリオ「誰だよ…？」

〇〇「俺は〇〇…」（エンディング）の友人だよ」

…」いつも同じ様な帽子かぶつてやがる…。色はオレンジで…模様

は…〇だな。

マリオ「…仲良いんだな…」

OP&HN「もひむる…」

マリオ「じゃあ最後に…それをポケモンに例えてみてくれ。」

OP「HNティーンは喋り方が正体現す前のエノワールだよなwww
ミ

HN「〇は…性格からして…ギャロップ（ ）でじょうかねえ…。

」

マリオ「…成る程な…え～と…そろそろ次に行くんだけば…」

OP&HN「じゃあ一緒にいひー。」

マリオ「どうもひだよ…」

OP&HN「これ（スクーター）でー。」「

…現実では運転できません…

マリオ「…じゃ、じゃあ出発な…」

OP&HN「ヒュウイ、ハーネー。」

そして…グダグダした自「」紹介の旅が始まった…・・・

{ 次回：有名な兄弟の住む王国へ！ }

1・作者とその友人（早速グダグダだ～；）（後書き）

マリオ「なあ…次つてまさか…」

エン「それは言わない事…！」

OP「それでは、次回をお楽しみ！」

1・5・王國くと向かう道中の悲劇（前書き）

マリオ「何かやる気マンマンだな…」

OP「そりやあ…暇だからな。」

マリオ「オイ！！」

1・5・主国へと向かう道中の悲劇

…前回から数分しか経つてないが…マリオは〇〇にマイクを渡した
(笑)

マリオ「何でなんだ?」

OP「そりや、次にマリオの紹介とかがあるからな。」

マリオ「……やつは次つて……」

HAN - 機構 - 二〇一四

マリオ&ドン - 良いから前向いて運転しろよ!!

マリオ：「せいかは俺：あいかに乗らなくて寝かされたわ：」

そう、それは数分前

エン・出発準備OK

OP マリオ！俺の後ろに乗れよ

マリオ「何で？」

OP 「……地獄を見たくないなら乗れ。」

メニホ「ス...お...お、お」

そして現在

マリオ「にしても知らなかつたぜ…。まさかこじまで…」

ぼやくマリオの視線の先にいるのはエンディング。周りの土管を危なつかしく避けている。

OP「あ、気をつけろ！…ジャンプ台あるから！…！」

叫んだが遅かつた様だ。エンディングは見事に後輪を土管に引っ掛けている。

エン「え、ちょ、あ……」

エンディングは土管に入ってしまった。二人は顔を見合わせ、出口の土管付近で待機していた。

エン「コイン大量に拾つたぞ」

と、エンディングは出てきた。何故かボム兵を連れているのには触れず、三人はそこを後にした。

そして やつと次の場所へと辿りついた。

（次回… やつと平穏なインタビューが…）

1・5・H國くと向かう道中の悲劇（後書き）

マリオ「てか何で一回もブレーク使わないんだよ……」

Hン「何か嫌なんですよー?」

OP「何だらうこのグダグダ感(笑)」

? ? ? ……早く出して欲しいなあ……。」

2・王國に在むキャララ達――――――（前書き）

H 「今世は張り切って一いつ皿――せつとトライツが……」

M 「誰だ？？？」

E 「……良べ知りてゐ篠ですがねえ。」

2・王国に住むキャララ達――――

ドタバタとした移動からさらりと少し。三人が着いたのは……

マリオ「やつぱり、キノコ王国じゃねえか――」

そう、我等がスーパースター・マリオの出身である、キノコ王国である。早速、キノピオ達が話し掛けってきた。

キノ1「あ、マリオさん――おひわじぶりです！」

キノ2「お元気でしたか？」

マリオ「おう――お前等も元気そうだな。」

三人が話している間に、HンディングとOアは目的の場所へと向かつた。

（場所・マリオの家）

Oア「……とこづけで、マリオの家の前へと来ました。」

Hン「彼はいるのかなあ？？？？」

Oア「ノックしよう（トントン）」

……。

Hン「……留守？」

OP「良し、入る。」

エン「いやいやいや……それは流石に……」

OP「クッパだつて何回も不法侵入してんじゃん？俺等だつて大丈夫だろ」

そして、二人は不法…ゴホン、アポ無し潜入をした。

エン「ルイ君いるかな？」

OP「いたいた 寝てるけど。」

ルイ君」と、ルイージは…ソファーでお皿ね中の様だ。可哀想だが、起こさなければ；

エン「ルイーん、起きるー。」

ルイ「ん…？？誰！？」

OP「俺等だよ ほら血」紹介」

ルイ「え…あ…。僕はルイージです…。」

エン「因みに彼のお兄さんはマリオです」

OP「次は…」の城まで案内してくれ

ルイ「何で僕に…？？」

エン「君のお兄さんとはばぐれたんですよ（笑）」

まあ実際には置いて来ただけなのだが；

OP「さあ出発だー」

エン&ルイ「ちょ、無理やり引っ張らないでよ！…！」

二人は見事なハモリを見せながら、OPに引っ張られていった。

（場所：キノコ城（あれ、ピーチ城だけ…））

OP「おお…広い！…！」

ルイ「多分ロビーだけで…僕等の家が十個は入ると思うな…」

それは流石に無いだろ？…

エン「あれ？あそここの茶色いキノコ…キノじいじゃない？」

三人で近寄つてみた。キノじいだった；

キノ」「おお、何をしとるのかね？」

OP&エン「インタビューの様なモノですねえ…。」

…彼はキノじい。恐らく最高齢ではないだろ？…ピーチ姫のじいやさんだ。

ルイ「あの…ピーチ姫は？」

キノ」「謁見の間じゃわから…行つてみると良い。」

ルイ&OP&エン「「「ハーア…！」」」

三人はキノじいと別れて、謁見の間へと向かった。

（場所：謁見の間（多分、ゲーム中には無いと思われます…））

三人は、謁見の間でくつろいでいる女性を発見した。彼女こそ、プリンセス・ピーチである。

ピーチ「あら…何か用かしら？」

OP「色々と自己紹介してもらつてます…ピーチ姫もどうぞ…」

ピーチ「私はピーチ。キノ」「王国の未来をいつも祈つてます…。」

そこへ…ガシャツ……と音がして、ガラスの破片が散った。

エン「いつた……？刺さつた…！」

ピーチ「何事ですか…！？」

? ? 「ガッハッハッハ…！」にいたのか…！」

インタビュー最中に入ってきた影…それは、クッパ…！クッパは姫を搔つ攫つていった…！！

ルイ「あ……姫……！」

OP「何でいつも波乱の展開に！？」

エン「どっちでも良いから追おつ！……（破片メッシュヤ痛い……覚えてろクッパ）」

そして、三人はクッパクラウンの影を追いかけた。

（次回…あの城への潜入！…）

2・王國に住むキャララ達――（後書き）

マリオ「なあ……途中から俺、空気になつてないか？」

ヒン「あ、気のせいでしょう？？」

ボム「……。」

OP「……やられ……ED化しなきも良一けどな。」

2・5・移動中の悲劇 再び（前書き）

H：「…………（クッパめ……）。」

O：「…………（や、まずこ……）。」

ルイ：「ド、ドは始まつ……。」

H：「本当に10月31日に投稿したかったなあ……。」

2・5・移動中の悲劇…再び

前回、ピーチを攫われてしまった！ あ、追ついでーー！

〇〇「…って言われても…先にコッシーン所行くか？」

ルイ「僕は良いけど…」

そこには玲姉さんと、お前…：

エン「かまわないよ？」

〇〇「んじゃ、行こうぜ！」

三人は（前回と同じ様に）スクーターに乗っている。マリオは置いてきた：

（場所：ヨッシーの家（緑のヨッシー））

ここは…良くマリオに協力している、緑ヨッシーの家だ。

ルイ「ヨッシー、いるかい？？」

ノックしてから数秒後。ドアが開いて、ヨッシーが顔を出した。

ヨッシー「何でしょつか…？？」

〇〇「自己紹介してください…！」

ヨッシ「えー？あの、私はヨッシーです。好きなものは…食べ物全般ですね。」

相変わらずの食欲のようですね…。

ルイ「そうだ、ヨッシー大変なんだ！またピーチ姫が…」

ヨッシ「またですか…まあ行きましょう！」

こうしてヨッシーが加わり、四人（？）になった。ルイージはヨッシーに乗った。

ヨッシ「こっちがクッパ城です！！」

ヨッシーの先導に従い、四人は家を後にした。

（場所：クッパ城へと続く道）

ヨッシーの先導で、ここまで来たのは良かつた。だが、ここからが問題だった。

ヨッシ「まず…直線に行くと、敵が多いんですが城に近いです。」

ま、良くありますなあ。

ヨッシ「そして…曲がると城に遠いんですが…罠が多いです。」

そうそう、ありきたり…な訳ねえじゃん！！何で罠が多いんだ！？三人は疑問にも思つてませんが；

エン「じゃあ直線に行けば良いわけだな」

そういうとエンディングは…スクーター放置で歩き始めた。…早速、ノコノコと揉めているが。

エン「通してくれさーい！」

ノコ「何でだ？」

エン「クッパ大王にインタビューです。」

ノコ「ならいい。」

おい。もうひとつ警戒しろよ。案の定、通れたのはエンディング一人だつたけど。

OP「がんばれよー（笑）」

ルイ「気を付けてねーーー！」

ヨッシ「ドンマイです。」

わあわまな声を聞きつつ、エンディングは進んでいった。

（場所：クッパ城ロビー）

クッパ城に入ったエンディングは、ふと飾りを見た。カボチャや蝙蝠…まさか？

クリ「何の御用で？」

受付（！？）にいたクリボーが聞いてきた。

エン「クッパ大王にインタビュー形式で自己紹介を！」

クリ「それなら、もう直ぐ終わるので、そちらに掛けていて下さい
」。

言われて腰掛けた。何故ピーチを攫つたのか…それは、次回…！

（次回…攫つた理由と空氣になっていた男…）

2・5・移動中の悲劇…再び（後書き）

エン「今日は長く書いたぞ~」

OP「確かにな~」

ルイ「一人で行くのは凄いなあ~。」

マリオ「俺は出れるのだろうか…。」

エン「それは次回

3・撫つた理由と怒氣の男（前編）

マツオ「何だよ上の題名（怒）」

H「 やあね。」

ルイ「呪文をやめなよ…Hンさん。」

OP「本当に10月31日に投稿するはずでした〜〜（Hンさん
って誰〜〜）」

3・攫つた理由と空氣の男

前回、クッパに待たされたエンディング…。のん気にパタパタと喋っていた…。

エン「へえ…なら、ミドパタの上が赤パタで、その上が青パタ…。

パタ「そういう事です。私は後少しで赤なんですよ~。」

エン「頑張つてくださいね~;」

そのお陰で見事にクッパに気づかなかつた訳だが。

クッパ「我輩を待つてているのは貴様か?」

エン「ん?」

パタ「クッパ様!!」

クッパ「何か聞きたい事があるそつだが?」

エンディングは振り向き…少し停止した。服が違つ…?

エン「…その服は一体…?…?」

クッパ「うむ、これが?これはハロウィンとか言つヤツの衣装だが

…。」

??「僕がしたいつていつたらしてくれたんだ!」

突然、クッパに似た声がした。その声は丁度クッパの後ろ辺りからした。

？？「僕はクッパ」「…宜しくね！」

エン「あ、ハイ。」

Jr.とクッパの衣装は…狼男風の衣装だ。ピーチも出てきた。衣装の見立てだつたのか？

ピーチ「あら、お久しぶりね。そつだ、あなたも仮装しない？」

そういうピーチの衣装は魔女風だ。まあ、エンディングは返事の前に引きずられて行つたが。

エン「あ～れ～。」

それをとめないクッパもあれだが（笑）

♪その頃のOP達♪

彼等は…とても暇そうにしていた。

ルイ「遅いなあ…。」

OP「まあ大丈夫だろ。アイツには切り札があるしな。」

ヨッシ「切り札とは？」

OP 「 何でもねえ…… 」

ヨッシ&ルイ 「 ???.??.?.. 」

～そしてクッパ達の方～

エンディングが再び引きずられて来た。もつきとは衣装が違つ。

ピーチ「 やつぱり彼、ドラキュラが似合つわね（笑） 」

ピーチの言葉通り、エンディングはドラキュラの格好をさせられて
いる。

エン「 …… 気を取り直して …… クッパ！自己紹介を！！ 」

クッパ「 む、我輩か？ 我輩はクッパ！！ カメ一族の長である。 」

エン「 ジー・モヂツゾ 」

Jr 「 僕も良いの？ 僕はクッパジャー！ ロクッパ七人集の中で
一番偉いんだぞー！ 」

まあ、 そ う か ど う か は 良 く 分 か ら な い の だ が。

クッパ「 さて… 子分達！ 今日は敵味方関係なく、 楽しんでこい… 」

子分「 ジー・オー… ！」

皆散り散りになつてどつ か行きました（笑）

クッパ「さて…我輩達も行くか…。」

「…一人も一緒にいこーよ」

「…お葉に甘えますか…??.」

ペーチ「わいしましょ」

～その頃のOP達～

OP「なあ、何でこんなにわざわざじてるんだ?」

OPがやつとノコノコに聞きました。

OP「しうねえのか?ハロウイーンとか言つヤツで仮装してんだ?」
「…まさかHンディング…」
OP「…まさかHンディング…」
OP「そひこや、わつき…狼男の親子と魔女とドリキュラが裏口から行つてた様な…」

OP「そひん、氣づいて下さこ・ルイージがヨッシーに言つと、二人は慌てて立つた。

ルイ「あの僕、お菓子を用意しないといけないので…。」

マッシュ「私はそのお手伝いだー。」

OP「なら俺も行くよ。Hンディングは多分、クッパ達と一緒に言ったてるだろつし…。」

三人は帰つて行きました。

その後、皆は楽しいハロウインを過ぎました。マリオも途中参加しました。

マリオ「俺も混ざりよ」

OP「OK」

そして、その次の日。エンディングが帰つてきました。ミッキーは既に帰っていました。

エン「たつだいま。」

OP「遅かつたな。」

エン「いやそれが…」「…に軽く懐かれた…」

ルイ「あーいい子だよね。」

エン「…次はどう行つか…。」

？？「決まってないんだつたら僕等の所に案内するよ」

その声と共に、四人は妙な空間へと吸い込まれていった。

～次回…謎の声の正体は…？そして、彼等の運命は…？～

3・握つた理由と空氣の男（後輩を）

マリオ「やつと出ねたぜ……」

ルイ「でも、まだまだいるんでしょう？」

エン「ああ、大丈夫だよ。」

OP「スマブラ系はまとめるんだつけ？？」

エン「うん。」

ルイ「……；（怒る人いるだらつくな……）で、ではお楽しみに。」

4・異空間から抜けた先は…（前書き）

マリオ「何でだ？久しづぶりにでたのに散々な目に…」

エン「何ででしょうねえ：」

ルイ「…僕、嫌な予感しかしない…。」

4・異空間から抜けた先は…

突如現れた異質な空間…。その中に吸い込まれた四人の運命は…?

～1：エンディングの場合～

バツシャン！ガボガボガボ…。ゲホッ！？

エン「ゲホゲホ…。う、う…」は…？？」

いきなり水面にダイブしたエンディングは、辺りを見回した。どうやら、風呂場に落っこちた様だ。

エン「あーあー…ビッシュョビッシュョだ（呆笑）」

もはや呆れるしかないが、近くにドライヤーがあつたので乾かす事にした。

エン「皆は…どこに行つたんだ？」

エンディングは小さく咳き、乾いたら探索しよう…。と思つた。

～2：OPの場合～

フカツ、という効果音が一度良いくらいのベットの上に、OPは落下した。

OP「オブフツ…ん？ フツカフカだなあ…でも寝てたら駄目だしな…」

OP「まだ残暑しきり立ち上がった。そして、部屋を注意深く見て…

OP「よし」

部屋の外へと走り出た。誰もいない廊下は、黒かった。

OP「ここって…暗黒城?」「

ま、そういう事ですなあ~。

→3：ルイージの場合→

ルイージは比較的安全な場所で落ちた。

ルイ「うわっ…。ん?」「…ソファーの上…? ?」「

そして辺りを見回す。誰もいない。ルイージは急に不安になった。

ルイ「…………（お化けでないよね……？）」「

変に不安になりながら、ルイージはおとなしく待っていた（何をだよ）。

→4：マリオの場合→

マリオはテラスに引っかかって、何とか下には落ちていなかつた。

マリオ「アップね~・」

上によじ登ったマリオは、視線を感じた。顔を上げると、一人の男がいた。

「マリオ……お前は！」「……」

「と呼ばれた男は、顔を上げた。ルイージとやつくりな……ただ、色は彼よりも濃い色だった。

「軽々しく名前を呼ぶな。」

イライラした様に咳くと、彼はそのままどこかへと歩いていった。

マリオ「やっぱアイツ……似てるな……。」

一人残されたマリオは咳くと、そのまま城の中へと入っていった。

（再びエンディングの場合）

エン「やつと乾いた。」

？？「よかつたねえ。」

エン「うん。」

おい、気づけよ。

エン「それにしても……何でティーメーン、手伝ってくれないのや？』

ディメ「自分でさせた方がいい経験になるでしょ？」

「ディメーンと呼ばれたこの男（？）…紫ベースの衣装を着ていて、顔には仮面をつけている。表情が読めない。

Hン「でもさ、こきなり引っ張り込むのは無しだと思つんだけど…」

「ディメ「ど」にも行くといひ無いとか言つてたじやん。」

ケンカしないで下さいよ?進まないの。

「ディメ「さて…会議室（ラスボスん所）まで行く？」

Hン「残り一人も紹介しないとね。」

もう紹介されますが。

二人はお構い無しに、歩いていった。

（場所：暗黒城（会議室））

会議室に着いた二人は、ソファーにいたルイージとOPから軽くビヤされた。

OP「遅いぞー（笑）」

ルイ「心配したんだからね…」

Hン「うめんよ…」

「ディメーンは早速ルイージに悪戯しにいつてますが。そこへM…」
「…がやつてきた。

Hン&Dイメ「あ、Hリリンー」

L「ハモるな……」

二人は正座させられます。そこへマリオ登場。

マリオ「何やつてんだよ……」

Dイメ&Hン「正座中ー。」

L「そこまで反省してん。」

O P「なあ、次はどう行く?」

Hン「やっぱマスハン達の所とか」

Dイメ「僕等も付いていいかい?」

O P&Hン「良こむー」

L「……（凄く不安だなー）」

Mリオ「…………（俺がきをつけねえとなー）」

こうして二人は……次の話まで正座をさせられる事になってしまった……。

～次回……こぞ、マスハン達の世界へ……

4・異空間から抜けた先は……（後書き）

マリオ「おい、一人とも顔色悪いぞ？」

エン＆ティメ「大丈夫……な訳あるか。」「

OP「アハハ お前等面白いな」

エン「…………（もつトイディアでないや……）」

5・これ、あの世界へ---(前書き)

H: 「……三日も正座をやらせてた……。」

デイメ「立てなー…。」

マリオ「本当にこれが、終わるのかよ?」

5・いや、あの世界へ！！

前回から一人増え、今の所6人で移動している。

エン「てかどうやって行くの？」

マリオ「大丈夫だつて。ワープ装置あるから。」

6人はワープ装置に乗ってロビーらしき場所へ着いた。

マリオ「久しぶりに来たな…。」

ルイ「本当だねえ！」

エン「本当！」

エン以外「「「「は？」」」

エン「あ～えっと…取材してくる…！」

マリオ「あ、逃げた…！」

五人はエンディングに置いて行かれた。

マリオ「…また出番なしか…。」

（場所：一階廊下）

エン「振り切った…。」

エンティングはのんびりと廊下を歩いていた。直線上に…ダンボールがある。

エン「…ダンボール…。良し…開けて見ましょう」

遠慮なしに開けたダンボールには、男が一人入っていた。

? ? 「ん? …大佐、また後で連絡する。」

エン「スネークさんか~やつぱり。」

スネ「何の用があつて来た?」

エン「自己紹介をどうぞ!」

スネ「ああ・俺はソリッド・スネーク。この無限バンダナから何でも出るぞ!」

エン「例えば?」

スネ「ダンボールや銃…果てには手榴弾だな。」

エン「お~お~…あ、マスター達は!?」

スネ「そうだな…終点あたりじゃないか?…二階から行けるんで。」

エン「ありがとうございます。では!」

スネ「…行つたか。……大佐!」

スネークは通信を再開した。

「場所：一階モニタールーム前」

エン「…何か声が聞こえ…うわあ！？」

エンディングの目の前には、銀の仮面をつけた小さな球体とピンクの球体がいた。

？？「君だ～れ？」

？？「ここではあまり見かけないが…？」

エン「私はエンディング。二人も自己紹介どうぞ？」

？？「僕、カービィ！吸い込んだ敵の能力をコピー出来るの～。」

？？「私はメタナイトだ。大王様をお守りしている。」

エン「成る程。…三階への階段つてどこのです？」

カー「そっちだよ？」

エン「ありがと～。」

エンディングは一人と別れた。

「場所：三階ワープ部屋」

エンディングはやつと、ワープ部屋に来ていた。…青い閃光が見えた；

？？「Hey! 危ないぜ！」

エン「おひ…」

出てきたのは真っ青なハリネズミだった。みんなお分かりだね；

エン「そっちも危ないよ…」

？？「そつか… S O T T Y .」

エン「自己紹介どうぞ（笑）」

？？「俺か？俺はソニック！素早いぜ！」

エン「こつからか…。」

ソニ「何か言つたか？」

エン「いえいえ…。」

エンディングはソニックと別れ、終点へ向かつ装置に乗つた。

（次回…終点の二人。）

5・これ、あの世界へーー（後書き）

「マリオ」…えらく最後は唐突だな？」

「H」、「時間がやばかった（笑）」

OP、「授業中に書くなよ…」

6・任天堂の神ー！（前書き）

エン「いよいよ彼等が！－！」

？？「俺のキャラあんまし知らねえくせに。」

エン「すいません！」

6・任天堂の神ー！

ワープ装置を抜けた先には……終点が見えた。いや、ホントに。

エン「やつこいやココ、全く来た事ないなあ…。」

ぼやきながら進む。…白い巨大な何かがあつた。手か？手袋か？

エン「お、マスハン。」

咳いで、そつと進んだ。足音を殺し、気配もなるべく消した。…元々、気配は薄いが。

エン「……（よし、近くまで来た）。」

どうやらマスハンこと、任天堂の神…マスター・ハンドはプログラムを直すのに熱中している様だ。

エン「……（せーの一〇）」

声を掛けようとした瞬間に、誰かに持ち上げられた。

？？「マスター、『イツは誰だ？

マス「ん？…何だ、Eか。」

エン「…久しぶり…。てかEって呼ばないで…」

言いながらも身を捻つて、自分を持ち上げているモノを見た。もう

一つ手袋が…。

エン「誰!?」

? ? 「俺か?俺はクレイジー。マスターの弟だ。」

エン「…本当!?」

マス「ああ。因みに彼が持つ力は、私とは正反対だよ。」

となると破壊の力か…。エンディングはある事を思い出し、二人に尋ねた。

エン「そう言えれば…一人とも、カービィでは敵として出てなかつたつけ?」

マス「出て…いたな。何で今更?」

エン「ゲーム中に会つたからだよ…叩き潰されたし。」

クレ「ハハハッ…ざまあねえな!」

エン「…………;(クレイジーの方を先に倒したつて言つたら、怒るよなあ;)」

マス「クレイジー、そろそろおひしてやつたらどうだ?」

クレ「へーい。」

…エンディングはどうやらつままれていたらしい。すぐに下され

た。

エン「さて……次は何処に行こうか…。」

マス「もつある世界には行つたのか?」

クレ「は?…………ああ、あそこな。」

エン「多分こいつでしようねえ…。」

マス「なら、行つてくれるといい。」

エン「マリオ達もいるけど…。」

クレ「それなら俺等に任せとこよ。この世界に置ことくから。」

エン「了解です!」

エンディングは一人と別れた。マスターの弦きは誰にも聞こえなかつた。

マス「…また暴走しないといいがな…。」

（場所：スマブラ競技場（？）前）

マリオ「あ、やっと来たな。」

エン「色々トラブルがあつてね…あ、マリオ達は『』で…。」

ルイ「そうなの?…ひょりと寂しいなあ…。」

ディメ「僕がいるよ」

L「お前な？」

エン「あららら…」

二人は四人と別れた。そして、例の世界へと向かつた。

OP「次は何処なんだ?」

エン「当ててみてよ」

次回…有名なネズミ…ギーヤアアアアア…!?

6・任天堂の神！！（後書き）

OP 「何があつたーー！？」

エン 「電氣…くら…た…」

？？ 「次は言わないでね！」

7・世界的に有名な彼等――（前書き）

○P 「おこおこ……題名が……」

H「自分でもよくわかりません……」

7・世界的に有名な彼等！――

前回、何故か痩れたエンティング。それでもOPと一緒に旅を続けていた。

OP「さて…次はどこ行くの?」

Hン「あそこだよ」

そこにあつたのは変な装置。エンティングがその上に乗ると、何とポケモンの姿になつていた。

OP「…あれ!? Hンティングか!?」

OPの田の前には、色違いのヨノワールがいた。人語を喋っている。

Hン「これでOKです。」

OP「口調まで…」

Hン「ほら、OPも早く乗つてください。」

せかされて乗つたOPの姿は、色違いのゲンガーになつていた。

OP「おお、変わったぜ!」

…なんで口調変わるの?。

OP「…で、何で色違いなんだ?」

エン「今から行くのはポケダンと呼ばれる世界ですからねえ。」

OP「ああ、だからか。」

二人は手始めに、トレジャー・タウンへと向かった。

（場所：トレジャー・タウン・カクレオンの店前（何でとぼしたかはスルーで！））

カクレオンの店の辺りまで来た二人は、見事にぶつか……りそなになったルカリオを透けてかわした。

ルカ（名前・？？）「あ、ごめんなさい！」

エン「いえ、大丈夫ですよ。…そちらは？」

ルカ「大丈夫です…」

僅かに緊張している様だが、波動が違うのに気付いているらしい。OPが名乗った。

OP「…俺はOP。こっちはエンディングだ。お前は？」

リオル「僕はリュウって言います！」

エン「はじめまして、リュウさん。」

そして握手を交わしている所に、カメックスがやってきた（口調がゼニガメのまま）。

カメ「お、リュウー！」元いたのか。」

リュウ「うん。」

カメ「…そこの一人は…？」

かなり胡乱げな顔で見られた（特にエンディングは）。先ほどと同じ挨拶をすると、

カメ「オイラか？オイラはベイ！よろしくな。」

二人はベイとも握手を交わした。エンディングがOPに耳打ちした。

エン「……（そろそろ行きましょうか？）」

OP「……（へーい）」

エン「さて…私達はそろそろ、ギルドに行きませんと。」

OP「そうだな。」

リュウ「今から？」

エン「はい。」

ベイ「なら、オイラ達と一緒に行こうぜ。」

… ついして二人と一緒に行く事になった。

（場所：ギルド前）

ギルドの前…そこには、足跡を鑑定（？）する網（？）があった。
リュウが言った。

リュウ「ここに乗つて、足跡をしてください…」

まずはOPが乗つた。

? ? ? 1 「ポケモン発見！ ポケモン発見！」

? ? ? 2 「誰の足型？ 誰の足型？」

? ? ? 1 「足型はゲンガー！ 足型はゲンガー！」

OP 「おお…。」

? ? ? 2 「セレニ… もう一匹…そつとも乗れ！」

HUN 「… 命令されるのは癪ですが… 乗りましょ。」

そして乗つた瞬間に、鑑定（？）が始まった。

? ? ? 1 「ポケモン発見！ ポケモン発見！」

? ? ? 2 「誰の足型？ 誰の足型？」

? ? ? 1 「足型は…えーと…」

? ? ? 2 「おじディグダ？ どうした…？」

「どうやら鑑定（？）していたのはティグダラしげ。まだ唸つてこる。

ティグ「だ……だつてえ……足が無いんだもん！」

「足が無いだあ！？……ん？ 前にもあつた様な……。」

「え込んでいる。そして、駆け上がりてくれる音。

「あーお、お前は……また性懲りも無くさやがつたな……。」「どうやらこの世界のヨノワールと勘違いしている様だ（本当に恥い奴なに……）。

「オイ」「ハー何できやがつた！？」

「何をわめいてる……！」

…今度は鳥ポケモンがきた。音符の形の頭…ペラッパか。

ペラ「何を騒いでるんだ！」

「だつてよ…またヨノワールの野郎が…」

ペラ「何だつて！？……ん？ 何だ、人…いやポケ違いじゃないか。」

…良く色が違つて分かつたな。

ペラ「どうせドゲームが迷惑を…。」

ああ、あの煩いのはドゴームつてのか。

「本つづ当たりすまねえ！！！」

エン「いや、何も謝らなくていいんだよ。」

ペラ「いやいや、けじめを付けさせなくっては…」

何故か謝り合戦の様になつてゐる；

ペテー もう…お詫びの用を案内しましょう!」

流石ペラッフ。巻く頭が回るな(笑)

「お詫びに掛けて、往復券」。

○四・おは・ケケケ

そして二人は、ペラッブについて行つた。

7・世界的に有名な彼等――（後書き）

OP 「オイー？ 最後詰ついたー？」

Hン 「錯乱しましたよ……」

8・プリン親方との対面（前書き）

OP 「色々な意味で大丈夫か？」

エン 「…テストダメかも知れません…」

マリオ 「勉強しろー！！！」

8・プリン親方との対面

さて……ギルドの中を探検だー（笑）

「場所：ギルドの地下一階～

今、エンディング達はギルドの中を案内をされている。ペラップが羽で示した。

ペラ「ここにある掲示板で、お尋ねモノを捕まえたり……探しモノを見つけたりするんです。」

エン「ほつ……（本当はゲームしてるから分かるんですが…）。」

そして、梯子を更に一つ降りた。

「場所：ギルドの地下二階～

ペラップが振り返り、再び羽で示した。

ペラ「そしてここが地下二階の……いわゆる生活の場、とでもいいますか……。」

そこには沢山のポケモン達が居た。まず最初にヒマワリの様なポケモンが反応した。

「？？？」「キヤ————！またワーワーが来たのですの————！」

それを聞いてビーバーの様なポケモンも反応した。

? ? 2 「またでゲスか！？ひ―――『命だけは―――』」

うん。面白い反応だなあ……。ペラップが怒った様に言つた。

ペラ「お黙りっ！――彼等はヒンティングちゃんとロマさんだ。未来的ノワールではない！！」

? ? 1 「そうなのですの？？御免なさい……。ワタシはキマワリですわ！」

? ? 2 「じめんなさいでゲス……あっしはビッパでゲス。」

その騒ぎを聞きつけたのか、ギルドの仲間達が集まつて來た。

? ? 3 「あら、新人さん？」

エン「いいえ；ただブクリンさんに挨拶を、と。」

? ? 3 「やうなのですか……。ワタクシはチリーンです。宜しくお願ひしますね。」

そして、一つの扉が開いた（表現がおかしいです……）。出てきたのはピンクの……

ペラ「親方様！彼等が挨拶をと……。」

…「コイツ等は私に恨みでもあるんですかね；
ナレーター

親方「彼等? ……あ、君達だね」

エン「私はエンディングと言います。」

OP「俺はOPだ。」

親方「ボクはプクリン。宜しくね、トモダチ」

お、プクリンも違つて分かつてるんですねえ。

プク「で、君達は何処から来たの?」

エン「ここよりも遙かに遠い所…とでも言つておきます。」

分かりそつて分からない回答。皆は首を傾げている。…質問に答え
ている内に、夜になつてしまつた。

チリ「あら、夜になつてしまひましたね…。」

その時、ビックパのお腹が鳴つた。続いて、リュウのも。

ペラ「あ…飯にするかい?」

全員「イエーイ」

チリ「おー人もいかがですか?」

エン「どうしまじょうか。」

OP「甘えさせてもらひつか。」

エン「そうですね…。」

ペラ「決まりですね。」

そして二人は、皆と一緒に食堂へと入つていった。

「その頃の…場所…あの装置がある場所」

ポケモンになる装置の前に、一つの影があった。その人物は装置を見ていた。

？？「…これは…。使用している、様ですぢや…。」

そして杖を振り上げると、炎を放つた。装置に当たり、壊れてしまった。

？？「これで、いいですか…。」

そしてその影は幕に乗ると、飛び去つていった。

「戻つて…場所…ブクリンのギルド入り口」

エン「お見送りは良いですよ。」

と言つたにも関わらず、リュウとベイだけは見送りに來た。

リュウ「また、来て下さいね。」

ベイ「良い所だろ?」

OP 「おひ。」

HN 「では…。」

そして二人は階段を降りて行った。その時のHNディングの表情は、強張っていた。

（場所：帰りの畳道）

OP 「ビビったんだよ？ そんなに急いで。」

HN 「確かめなければいけません。…ああつーー！」

HNディングの視線の先、装置は、見事に壊されていた。

OP 「オイ、何が…ゲゲッ！？ 何だこりやー！？」

HN 「…やはり…壊されていましたか…。」

OP 「どうこう事だよー！」

HN 「…今は一刻も早く、マスター達の所へ行かなくてはーー！」

言いながら、装置を念力で浮かせた。そのままワープ装置へと向かつて行った。

OP 「…一体、何が起きてんだよ…。」

OPもボヤキながら、HNディングの後にひいて行った。

次回：壊された装置。果たして一人は人間に戻れるのか！？

8 プクリン親方と「」対面（後書き）

「一つ事はよ、装置が直るまでのままで。」

エング「そうこうつ事になりますねえ……。」

9・あれ、マイツ等スーパー・マリオ RPG の奴等じゃ…（前書き）

〇ア「オイ、題名は決してこう事だよー?」

H「…」「どうもなにも…そのまま（笑）」

マリオ「嫌な予感しかしねえよ…」

9・あれ、コイツ等スーパー・マリオRPGの奴等じゃ…

前回の場所から、エンディング達は何とか戻ってきていた。

OP「ふう…やつと着い…ん? 何かいるぜ?」

そこにいたのは、背が異様に高い、白っぽい人物だった。

エン「あれは…出ても大丈夫ですよ。」

そう言つて、エンディングは出て行つた。その人物の目の前に。

エン「どうも、お久しぶりです。」

? ? 「ああ、久しぶりだな。…その姿という事は、また壊されたのか。」

エン「どうもその様で…。」

? ? ? 「おーい、早く行くのニヤー!!」

? ? 「直ぐ行く…また会おう。」

エン「ハイ。」

短い会話が終わつた。OPが僅かに驚いた様に言つた。

OP「そつものって…まさか、カリバーか!??」

エン「そうですが？」

あつさりと言づなよ……何故、彼が人型なのか。それは……

OP「何で人型なんだよ。」

エン「私が彼等に人型を与えました。……彼の他にもいるでしょう？」

OP「まさか…コミンパとかか！？」

エン「ご明答。」

との事。二人は移動速度を上げる為、上空の移動を開始した。

（場所：ワープ装置を抜けた、ロビーらしき所）

二人は、マスハンに装置を直してもうつ為に、再びやつて來た。

エン「さて、行きま～」

OP「まで、誰かいるぞーー？」

そこには、ルイージ達四人と人の様な形をした、ポケモン。

エン「…仕方ありませんねえ…シーツでも被つていきます？」

OP「しゃーねーな～」

二人はシーツを被り、通り過ぎようとした。

「マリオ、ちよつと待て……お前等誰だ！？」

予想通り、マリオに止められました；

「……直ぐ私達を討られるとは……」

マリオ「何だ、お前等かよ……」

「……悪いか……」

「……あ、そりだ。彼にも自己紹介させないと……」

「……私はコウガジー。エスパートタイプでは最強と言われている。

「……おや、それは違つと思こますよ……エスパーは他にもルギアとかこゑでしょ……」

「……サイコキネシス……」

「……サイコキネシス……」

いや、いいじのコウガジーをそばにいたり怒つてしまふ様で……放たれたサイコキネシスは、ヒンティングに当たった瞬間に消えてしまつた。

「……な……」

「……（しまつた……）」

ヒンティングを、どうやら攻撃をされたとは思わなかつたもよつ……

「ディメ、君等のシーツ取るよ」

いつの間にかディメーンからシーツを取りられました・姿があらわになり…

ルイ「ギャアアアアア…お化け…！」

ルイージの叫び声で騒然となりました；

「誰だお前等…！」

ミコ2「彼等はポケモンのゲンガーとヨノワールだ。」

マリオ「ポケモン！？」

マス「おい、どうしたんだ？」

余りの騒がしさに一人が出て来ました；；

マリオ「コイツ等が一人の名前を騙つたんだ…！」

クレ「ん？コイツ等がか…。お前等ちょっとこいつかこ…。」

マス「待て！“宵の月を見る者よ”」

エン&オル「汝は曉に呑まれたり”」

マス“呑まれた者はそこで知る”

エン&オル“自らが何者か、何をすべきかを”

マス「…彼等はどうやら、本当のエンタイングとOYAの様だ。」

クレ「わつきの言葉は何だよ…？」

マス「彼等がもしもこの姿で訪れた時、本人がどうかを確かめる為の言葉さ。」

そして、マスハンは一人に向き直った。

マス「何があつた？」

エン「それがですね…例の装置が壊されまして…」

マス「またか…しかも今回は…OYAもでも…」

OYA「直せるか？」

マス「ああ。だが…一日はかかるだ。」

エン「…………ここに泊まつて良いですか？」

クレ「条件付きでな（笑）」

クレハンは奇妙な動きをしながら、含み笑いしている様な声で言った。

クレ「“皆と乱闘する”だけ（笑）勿論、メシ・風呂・部屋はあるぜ」

エンディングは少し考える素振りを見せた。ミュウツーは考えが読めている。

エン（考え）『泊まりつ。そりしなければ、色々と面白いですしね。』

そして、エンディングが口を開いた。『あれ、ヨノワールのロビーダ（笑）』

エン「やつですね…。お言葉に甘えましょつか。』

すると、マリオが口を開いた。

マリオ「じやあ早速、俺と乱闘しようぜー。』

エン「受け立ましょ。』

そうして、二人（+）は乱闘をする事となつた…。

次回…乱闘が開始する。

9・あれ、コイツ等スーパー・マリオ RPG の奴等じゃ……（後書き）

Hン「乱闘ですねえ……容赦しませんよ?」

マリオ「やつぱ、口調が違うと向かれないな……」

OP「俺もだせ(笑)」

ルイ「……（お化け怖いお化け怖い）」

デイメ「ルイルイ落ち着いてよ……あれ、エリリン??」

」「お、俺は怖くねえからな……！」

デイメ「……（震えながら言つても説得力ないよ……）」

10・乱闘開始！――（前書き）

OP「手、大丈夫かよ？」

エン「大丈夫ですよ。：かじかんで動かないだけですから。
」

OP「おい：」

10・乱闘開始！！！

エンディング達は、早速…乱闘を始める為に、クロシアムへと向かつた。

「場所…それぞれの控室へ

マリオ「にしても…戦つた事無いんだよな…あの姿は。」

エン「皆さんそうだと思いますが？」

ルイ「ああああああ！」

…ルイージ…早く慣れてやつて…エンディングが悲しそうだ…

マリオ「何でーーーいるんだよーーー？」

エン「いえ…つこうか…壁抜け出来る事を発見しましてねえ…。」

「流石、化けモノと書つた所だな。」

エン「…マ…」わん…貴方は私が倒します。」

どひやら先程の言葉で鬪志に火が付いた様です。

エン「…さて…始めましょうか？」「

マリオ「いや、お前はあっちからだろ…」

Hン「そうでした：」

ルル…………試合開始です！――

Hン「あれ、1VS3ですか……」

小さな事は気にせず、スタート――

（乱闘スタート――）

Hン「……何で一人……」

エンディングさん、まだ嘆いているもよひ。

L「うつから行くぜ？」

Mr・Lはエルガンドラーを呼びだした！エルガンドラーがミサイルを
撃ち出す！――

エンディングはミサイルを避けた――――マリオにダメージ――

マリオ「何で俺にダメージ！？」

避けたミサイルが当たったからです。

エンディングのシャドーボール！マリオにダメージ――

マリオ「何で俺ばかり……」

Hン「直線上にくるからですよ……」

マリオの攻撃、ジャンプで踏みつけ！

しかしHンティングには透けて当たらなかつた！

マリオ「せつけ…………！」

ルイージが（名前忘れたよ……正式な、ね；）必殺球を取つた！

Hン「…………しまつた！」

エンディングは慌てて距離を取つた！

ネガティブゾーン発動！……マリオとM'r・Lは勝手に眠つた！

L「眠氣が…………」

マリオ「またかよ…………」

エンディングがM'r・Lへと向けてシャドーボールを連発！

M'r・Lはなす術もなく場外へ！

マリオ（復活した）「な、つ！？（あんなに威力あんのかよー！？）

エンディングが必殺球入手！！

ルイ「出るの早くない！？」

作者の都合です。……常闇の性さが發動！

あー解説します……今、エンディングさんの周りには六つ……ま
さしく、眼が浮いてます。

そしてフィールドは…黒い炎で埋め尽くされてしまいます。上方の足場は無事です。

マリオ「う…動けねえ…!? そうか！あの眼のせいか…！」

エン - ご名答
： 何故川イ-シさんは動けるんでしょニ-カ？？

それも私から。それは…見た瞬間に田を逸らしたからでしょうね：

炎が消えた！！マリオは……フラフラだ！！！

マリオ「くそ……」

追いうちをかけるようにシャドーボールを放つが、ファイアボールにかき消された！

マリオはエンディングに急接近し、ポンプで流した！

HANDBUCH

エンディングさんは何とか耐えきった様だ！そこヘルイージの下キック！

しかし浮いているので意味が無かつた！ルイージそのまま場外へ！

マリオ「？ルイージー！…よくもルイージを…」

H「…（や、あれ…自爆なんですね）…せ、せつと本領を出す
様ですね…！」

マリオさん、何せり勘違にわれておつます。スマッシュボールをマ
リオが取った！

マリオ「？必殺球の正式名称出でる…」

ツッコミ無視しましょつ。マリオの最後の切り札、マリオファイ
ナル炸裂…！

H「…」

H「…」

H「ぐ…ぐあああああ…」

エンディングさんはそのまま場外まで吹き飛ばされた…！…
終了…！…乱闘終了…！…

勝者…マリオ…！

～場所：それぞれの控室～

「お前ひどくねえか…？」

「…」
「…」
「…」

マリオ「（怖えええ…）まあ良いじゃねえかそれに…そろそろメシだぜ」

四人はノンビリと食堂へと向かった。…おや、エンターテイニングさんが振りかえりましたね。

エン「…先程の技は秘密ですよ。」

小さく笑って、歩んで行きました。

次回…食堂の「」飯は…？？

10・乱闘開始！――（後書き）

OP 「ボッコボコにされてんじゃねえか（笑）」

Hン「仕方ないじゃ無いですか？」

マリオ「次は誰が戦うんだろうな？」

1-1・食堂での食事（温着丸）

○ア「もしもメシだな」

ヒ「アハ… で、ね…」

マコト「アハ… もう… ローリー… へ…」

11・食堂での食事

今回は…ああ、「飯ですね。

リンク「できましたよー！」

彼等を呼んだのは、リンク。彼もスマッシュショブランザーズの一員で、緑色の服が特徴的。

リンク？「早く～！」

…あれ、リンクがもう一人…あ、そうだ…こつちはトゥーンの方です。区別の為、トリンにしましょ。

エン「やれやれ…子供は元気ですねえ…」

OP「ホントだぜ。」

二人は笑いながら呟いてます。聴こえてなくて良かつたですね。

ルイ「御免ね？今日の夕食の準備、任せりやつて…」

リンク「大丈夫ですよ。姫が手伝ってくれたので。」

成程（ひゅーひゅーですか？

リンク「トライフルースラッシュ！…」

え、ちょ、ギャアアアアアアア…？

Hン「…ナレーターさん吹き飛びましたねえ…。」

OP「ホントだなケケツ。」

…復活…まだまだいますからね……

OP「早っ。」

マリオ「セウジヤ、今日は何だ?」

リンク「今日は…（Hンティングさんが大好きな）カレーですよ。」

Hン「嬉しいですねえ。」

その場の全員「（ビリヤキで食べるんだろう…）」

疑問に答えますか？

Hン「嫌ですよ。」

OP「カレー持つてどうか行くなよ……」

カー「それじゃーいただきまーす……」

全「……いたきまーす……」

えーっと…マスター達まだ来てませんけど……ま、いつか…

マリオ「Hンティングは何処だ？」

カレー「メタナイトと一緒に食べてるよー。」

OP「流石、素顔見せないジリしだな（笑）」

ルイ「確かに仮面してたなあ…。」

ディメ「僕は見てみたいなあ。」

L「見れねえだろ。」

エンディングさんとメタナイトはのんびりとカレーを食べ終わっています。

メタ「次は私とも闘つてもらひついで。」

エン「良いでしょうとも。」

あーあーなんか協定みたいなのが結んじゃったよ、この二人・あ、マスターだ。

マス「二人とも!修理が出来たぞ。」

OP「本当か!?!」

エン「それは良かつた。」

マリオ「折角だから」と戻つて見せてくれよ。」

クレ「それ、良いな。」

良くないでしょ普通・Hンティングさん達は領き合つて、一人ずつ
装置に乗つた。まずOPから。

OP「…やつと戻れたぜ…」

あらり、喋り方そのまま?…次はHントティングさんですね。

Hン「…やつと戻れた…」

こんだけは仮面さん。

Hン「誰が?」

…御免なさいもひまらせん。ルイージが言つた。

ルイ「凄いなあ。…でも誰が作ったの?」

Hン&OP「…」

無言にならないで下りこ。怖いので。マスターが笑いながら言つた。

マス「ハハハ…まあ、良いじゃないか。…今日は泊まつていかない
か?」

Hン「…甘えます?」

OP「そだな。」

一人は泊まる事になる様です。…おやおや、少しだけマスターは心

配そうです。

マス「…………（大丈夫だろ？か…今度こりゃ）」

さて…今回の事件は、夜に起ころ事となる。

次回…夜の事件。

11・食堂での食事（後書き）

OP 「次回予告短っ……！」

エン「仕方ないでしょ。」

マリオ「事件つて……マスターは何か知つてそうだな……。」

12・風呂&夜の事件（繪書モ）

○ア「風呂ひて向だよ。」

ハシ「風呂な風呂でしょ。」

クレ「マスターが日本好きで日本風の風呂になつてるや（笑）」

前回、やつと人間に戻れたエンディングさんとOPさん。風呂へと入る様子です。

「ほん「iji」の風呂は普通ですかね？」

「さあな。俺らん所とは違うかもな?」

二人は扉を開けた。

マリオ「よおーお前等も入るのか?」

OP「おうー！何かあんまり変わつて無いな！」

二人が入ったのは正に…日本の温泉でした（笑）

クレ「マスターが好きなんだよなー」こういうの。」

「… まさかクレイジー・ハンドー?」

エン「人型を与えました（笑）」

…またですか；見た目は茶髪で左耳を隠した…ま、普通の人っぽいですね。因みに服は黒です。

クレ「普通って何だ?」のヤロー。」

御免なさい爆弾しまつて下さい。…一人ものんびりつかります。

カーネタナイトー何で仮面外さないの?それにエンディングも
!…。」

メタ&エン「素顔を見せぬのが騎士!…!」

OP「エンディングは違えだろ;」

ルイ「アハハハ…あ、後で一人の部屋を案内するね!」

OP&エン「イエーイ」

そして数分間、ワイヤーと過ごした。

（場所：一人の部屋までの廊下）

ルイージに案内されながら、一人はノンビリと部屋まで歩いて行つた。

ルイ「…ここが一人の部屋だよ。や、これがカギ!無くさないでね。」

OP「サンキュー」

二人は部屋へと入った。至つて普通だ。

OP「もう寝ようぜー（笑）」

エン「はーい。……ZZZ。」

OP「？早つ……」

そして数分後…全員が寝静まり…事件が起ころ。それは、とある場所から始まる…。

（場所：庭園（花））

ここは、花が沢山咲き誇る庭園。そこには、段ボールが大量に置かれてあつた。

スネ「…ああ。心配ないさ。」

はい、予想通り…スネークさんが誰かと通信中。…おや、誰か来ましたね。

スネ「…オタコン、後で連絡する。」

オタコンでしたか。大佐だと思ってたのに。…足音は近付いて、スネークの段ボールは持ち上げられた。

スネ「…何だ、お前か…。」

持ち上げたのは、スネーク達が知つている筈の人物。だが…

“その人物”は指を鳴らした。その瞬間、スネークは四方から現れた闇に包まれた。

スネ「どういう事だ！おい！」

スネ「…パラノーマル・ゾーン。」

“その人物”は再び指を鳴らした。闇の爆発と共にスネークはフィギュアになってしまった。

“その人物”はフィギュアを一瞥すると、そのまま歩き去つていった。

ルイージに発見されるまで、スネーク・フィギュアはそのままだつた。

次回：新たな犠牲者、そして“ある人物”的正体…。

12・風田&夜の事件（後書き）

OP 「怖ええええ！？何で！？誰だ！？」

エン 「私にもサッパリ……」

マリオ 「俺らが知つて油断するヤツ……まさか……？」

番外・何が欲しい？（前書き）

OP「は？」

エン「いえいえ、正式には…“クリスマスには何が欲しい？”です
よ。」

それをインタビュ－見たいにするつて事ですね（笑）

エン「そういう事です。…ナレーターもここにきましたね（笑）」

番外・何が欲しい？

…前回までの事件はさておき、今日は皆でインタビューを仕掛けます。

マリオ「…で、このチラシなのか？」

『全員に聞く、インタビュー クリスマスは何が欲しい？』

そう言つ事ですね。じゃ、バンバン行くので答えて下さい…！

マリオ「俺は…キノコ五個セツトだな。だつて美味しいし。」

やっぱりマコオ＝キノコ！

ルイ「僕は料理の本だね。もっとレパートリーを増やしたいし…！」

流石、スマブラの主夫（笑）

「俺は部品だ…機械のな…！」

…また作る気なんですね…；

デイメーン「僕はねえ…やっぱり紅茶のセツトだねえー」

デイメーンが紅茶好きってのは作者の思いこみです（笑）

ビー「私はフライパンかしい。」

…ああ、また犠牲が増え」（吹き飛ばされました）。

クッパ「我輩は息子と過ぐす時間だな。」

おお、子供思いだな（笑）

Jr「僕はお父さんと遊ぶ時間！」

以心伝心ですね

クリ達クッパの部下「俺（僕）達は怪我したりした時の為の救急キットド！」

おお…凄いな、何か；

ん～…もう一人いる気がするな…ま、紹介しないから出さないつもりみたいですがね（笑）

リン「私ですか！？今は…ニワトリですね。そうすれば卵を産んでくれますし。」

流石スマブラの主夫一|号ー

ゼルダ「私はゆっくりする時間が欲しいわね…。」

おお、ヒューヒュ…（再び吹き飛ばされた）。

トリン「僕は命を守る力ー」

良い事言つ子だなー！

ガノ「…本だ。」

(出でないけど) 怖い……

スネ「武器を磨くモノが欲しいな。」

あー何と無く想像はしてましたよ…

ピカ「でんきだまが欲しいな!」

あー電撃の力を上げる為ですか…ってHONDeingさん死んじやい
ますよ:

ミコ2「“ああいだま”といつ技だ。」

悪タイプに勝つ為ですね(ミカルゲには効きませんが…)

ソニー「シユーズだ! 直ぐにオジヤンになるんだ。」

走るの早いですもんね:

カーラ「食べも」

それはあかんでしょう。サンタさん涙目ですよ…

メタ「仮面だ。無理なら部下に向かやってくれ。」

…仮面はHONDeingさん達に頼んだ方が…って部下思いですね。

ミッシ「僕もたべも

だからサンタさん泣くよー? ?

キノP達&キノ」「姫様の安全を守る為の何かを!」

何かって何!?

マス「私は…平和が欲しいな。…もうあんな事が二度と起きない様な…。」

うん…それが一番ですよ :

クレ「俺は悪戯グッズだな(笑)」

流石だなあ…。

リュウ「僕は“はどうだん”を覚えたい! ! !

頑張つてください :

ベイ「オイラは強い技!」

いや、ちゃんと名前いって下さこ;

ギルトメンバー「リングゴ等の食糧! (僕はセカイイチ) ! ! !」

最後のは親方だな絶対。

カリ「…俺は錆止めとか…だな。」

元々、かなりデカイ剣ですもんねえ……

…おや、ここからは作者達ですか（笑）

O P 「俺は3DSだ…! 持ってねエし！」

ああ、だからまたに借りてるんですね；

H N 「私は…Wi-Fiです（笑）」

借りてしますもんね（笑）

O P 「ナレーターは？」

私は…寝る時間です。

H N 「ダメじゃないですか…」

～オマケ：ある人物＆兄貴（F）＆まだ未紹介の友人達・ナレーター～

? ? 「…サングラスだ。」

F 「自由（即答でしたよ）。」

? ? 「俺は～PSPがええ！ ホンマに欲しいんや！」

? ? 「俺は現金ダ。」

？？「俺は…怖がらなくなるスキル…。」

？？「俺は怖いＤＶＤ（笑）」

？？「私は料理をもつと美味く作りたいです。」

…多種多様でしたね；

次回…本篇に戻りますよ～（笑）

番外・何が欲しい？（後書き）

OP「こうして見ると……色々違つた（笑）」

エン「そうですねえ～…。」

マリオ「最後の五人は？」

エン「まだ紹介していない友人達ですよ～」

1-3・講師者とは?~やして神戸でも~? (前編)

○ア「お前... タイトル考えんの面倒になつてあたんじや...」

H「大丈夫ですよ(笑) 今日はひやひやと終わらせたいんで。
出でなご金剛」「「「オイ」「ハ...」」」

13・襲撃者とは？そして神までも？

前回…いや、前々回…不審人物が侵入していた。皆はルイージに叩き起された…。

マリオ「…で、何で起されたんだ？」

ルイ「それが…スネークがフイギュアになつて…」

マス「…早く復活せろ。」

…ん？マスターがここにいるとは…ルイージ叩き起したな…？おつと、スネークは復活！

スネ「…には…お、皆いたのか！」

？？「スネーク、一体何があつたんだ？」

聞いたのは、キツネだ。一足歩行している。…あ、スマセン…彼はフォックス。スター・フォックスを率いる優秀なパイロット（…）です。

スネ「…ああ、俺にも信じがたいんだが…」

スネークは一瞬、間をおいた後…“ある人物”を語った。

スネ「少し雰囲気が違っていたが…あれは間違いないく、エン、ティングだ。」

それを聞いた瞬間、皆の表情は固まつた。ある人物を除いて…。

マス「…やはりか。」

マリオ「やはりって…どういう事だ！？」

マス「それは…」

OP「なあ、なんの話してんだ？」

お、エアーブレイク…スマセソススマセソ…ビリヤウ今、起きた様です。

フオ「それが…エンディングってのが裏切つたとか何とか…」

OPの表情が僅かに変わつた。そして、マスターにいった。

OP「…それ俺から話すわ。」

そして、重い口を開いた。

OP「エンディングは…普段の性格以外に、二つほど違う人格を持つてんだ。今の時はEDつて名乗つてるよ。」

ピカ「それって…二重人格つて事？」

ピチュー「こじゅうじんかくつて何？」

あれ、何気にピチューが初登場してません？ピチューはピカチュウの進化前です

ミコ2「一重人格…つまりは…“私”は“私”だろう?だが“私”の中に違う誰かがいる…という所だ。」

ミコウツーさんも少し分かり易く話で下さい。でも皆分かつた様です……

マリオ「…どうすれば止めらう?」

ピリコリリリリー!ピリリリリリリ!

マス「…私だ。」

クレ『マスター!大変だ!エンディングの奴が反乱起こしやがった!…』

マス「!…直ぐに行く!それまで耐えろ!」

マスターは通信を切つた。そして、その場の全員に言った。

マス「…これは緊急指令だ!エンディング…いや、EDを見つけ次第、直ちに捕縛!出来るだけ傷付けるな!」

ピカ「でも…襲われたら…?」

マス「…やむを得まい…。」

全員が解散する直前、スネークが一つだけ言った。

スネ「皆、聞いてくれ。…“彼”が指を鳴らす素振りをしたら、く

れぐれも氣を付ける。」

ピチュ「何で…??」

スネ「一撃で……ファイギュア化する。」

その場の空気が…張り詰めた。

マス「…それは無線で追々話そつ。皆一氣を付けるよー。」

そして全員、それぞれの場所へと散つて行つた。マスターとマリオはクレイジーの所へと向かつて行つた。

次回…EDの目的。

1-3・魔晄炉はいつ神木ですか？（後編）

「……やつらが出てたか……。」

「アーニー、前回のグリサンヒーお前か？」

「……魔晄炉はいつ神木ですか？」

14・EDとクレイジーの闇い（前書き）

ED「…手がかじかんでるだあ？ 気合で書けー。」

OP「誰と話してんのだ？」

ED「作者だーーー！」

14・EDとクレイジーの戦い

OPから話を聞いた。スネークの証言もあった。それでも信じられない。何故、アイツが ？

前方から、戦闘の音がした。時折、地面が揺れる程の轟音がする。急がなければ。

だが、辿り着く寸前…音が止んだ。マリオとマスターは速度を上げた。

マス「クレイジー！無事か！？」

二人が止まりつつ聞くと、そこには

ED「…何だ、もう来たのか。」

エンディング…では無くEDと、睨みつけているクレイジーであつた。

クレ「マスター…」「イツやばいぞ！」

ED「やばい…ね。」

EDは肩を竦める動作をした。

クレ「エンディングお前…舐めてんのか！？」

マス「…クレイジー、アイツは…」

マスターが言いかけた所で、EDが口を開いた。

「…どうも」いつもハントイングハントイングって…」

言いながら、片手を眼の前まで持ち上げた。

「俺はEDだーー！アイツと一緒にするんじゃねえーー！」

指を、鳴らした。その瞬間、マスターが素早く動いた。

光の空間を作り出し、闇の空間と相殺させた。EDは舌打ちし、手を下した。

ED 「...んだよ...」

ブツブツ言わないで下さい。」

クレ「マスター！どういう事なんだよ！アイツEDとか何とか…」

マス「それは……」

マリオ - マスター !

マスターが見た時、既にマリオとエドの背中は小さくなっていた。

マス「マリオ!」

マリオ「心配するな！居場所は追々伝える！」

マス「深追いはするなよー。」

マリオ「ああー！」

その言葉を最後に、二人の姿は視界から消えた。

クレ「マスター… アイツは何もんなんだ？」

マス「…彼は…エンドeingの負の心の集まり…とでも言つのか
もな…。」

次回…EDの行方は？

14 • EDとクレイジーの闘い（後書き）

ED「…最後の言葉はある意味、正解だな。」

OP - そうなのかな?「

マリオ - 口悪したけたる

田口・ノラ合

○四・そ
それではまた――――――

15・エドヒマコホの追走劇（前書き）

OP 「確かにそうかもだけじゃ……」

H 「アホな事件が起るかも知れません（笑）」

ED 「…………（二つか本気で乗っ取つてやる）」

15・EDとマリオの追走劇

マリオは前回から、EDをずっと追いかけていた。今は螺旋階段を上っている。

マリオ「アイツ……変な上り方しやがって……！」

マリオの言ひ通り、EDは犬の様に階段を駆け上っていた。

彼曰く、普通に上るよりも上り易い……だとか。

唐突に階段が終わつた。目の前には（湖レベルの）広い池が広がつていた。

マリオ「広いな……。」

呟いたマリオの田の端に、逃げるEDの背中が映つた。

マリオ「あーー待てーーー！」

ED「待てと言つて待つ奴が居るかーーー！」

マリオ「え、何でーーて止まれねエーー？」

スピードが付いていたマリオは簡単には止まれず……EDもろとも

池に落下した。

マリオ「冷てえ……」

ED「何で止まらなかつたんだー?」

マリオ「スピード出てんだから止まれる訳ねえだろーー。」

ハイハイ一人とも、喧嘩はそこまでにして下さい。茫然と見てるの
がいるから。

? ? 「二人とも…何をしてるんだ??」

彼はエインシャント卿。いわゆるロボット達をまとめん人(?)で
すね。

喋り方が違う?…そりゃ…亞空事件の時そのままですもん。

マリオ「…通信、聞いて無いのか?」

卿「…それが部屋に忘れていた様で…。」

オイ、何で忘れるんだよ…マリオの心の声は聞こえません。

卿「えつと…ハンドティングせん…ですか??」

マリオ「…なんつーか…えつと…二重人格つて分かるか?」

卿「分かりますよ。」

マリオ「それなら早いな。コイツはもう一つの人格の方で…」

……あれ、やけに大人しいですね？

ED 「…………（まさか池に落ちるなんて…初めてだ）」

ああ、茫然としてたのね。

卿「……成程。それで捕まえよつとして…池に落ひたと。」

マリオ「改めて言わないでくれよ…」

…やつぱり卿…好きだなあ…BY作者

卿「お二人とも…風呂に入つた方が良いんじゃないですか？」

マリオ「…そうするか…。お前はどうするんだ？」

マリオが茫然としているEDに向かって声をかけた。コックリとマリオを見て

ED「…入るや。」

と答えた。一人は床をビッシュショッシュにしながら、風呂へと戻つて
いった。

卿「…私が拭くんですかね…」

卿…御免なさい…

次回……つてあれ、何でこんな展開???????

15
・EDOとマリオの追走劇（後書き）

「次回予告になつてねえええええ！」

「…ニツモアシテ。」

ED「…開き直つたな…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9706x/>

作者＆友人…そして例のキャラ達の紹介

2012年1月14日15時53分発行